

HAARP は人工地震兵器ではありえない！
その理由とは！？

※補足：

このファイル上に書かれている URL はクリックできます。

できない場合は最新の Adobe Reader をダウンロード(無料)すれば可能です。

→ <http://get.adobe.com/jp/reader/>

さてようやく HAARP (ハーブ) について詳しく触れる時が来ました。

これまで情報を精査し、地震兵器として使えるか使えないか? という観点で、よく聞かれる情報の信憑性を確認するために物理的法則に矛盾していないか?

ということ意識しながら考察検証しておりました。

先に結論から言いますと、HAARPが電磁波を照射したとしてもその電磁波によって地震は起こりませんし、起こりえません!

では早速以下にその根拠を列挙していきたいと思います。

まずは、HAARP説肯定派寄りの代表的な情報。

→ <http://onair-blog.jp/hellofive-koji/entry/184571.html>

そして否定派の方が提示する根拠

→ <http://plaza.rakuten.co.jp/kurukku2004/diary/>

このロザリー・バーテル博士の主張は、かなり有名なものようです。

しかしこの方のブログでも説明されている通り、専門外の知識に関する主張は説得力がないのわかります。

またHAARPが地震を引き起こせない理由が述べられていますが、これは実には的を得た指摘になっています。

この博士の権威や肩書はいかにも立派ですが、以前にも触れたようにこれは当てにしないほうがいいです。

HAARPの持つ様々な機能の中でも重要な部分を隠す意図で、あえて物理学専門ではないこのような肩書を持った人物の誤った考えを広めることで、大衆を誤誘導するのに利用されてい

る・・・とも、一応取れはします。

こういった手法はよくあるようです。

→ 陰謀論

「政府や諜報機関などが、カウンター・プロガンダを用いる際には専門家や大学教授など権威者を利用して、疑惑を消し去るための言論活動を展開させることは常套手段である。」

まあそれはともかく、他にも 2ch に同じようなかなり核心を突いた根拠が示されていたので、長くなりますがこちらも載せておきます。

それらの内容を理解するには少なくとも、以下の電磁波の特性を理解しておく必要があります。

→ 電離層

→ 電波伝播 , → (参照図：電波の伝わり方)

→ スプラディック E 層

→ 電波の周波数による分類

→ 電磁波の種類と特徴

→ 電磁波の性質

→ 周波数と波長

以下の 2ch の内容は主に

→ <http://logsoku.com/thread/hayabusa.2ch.net/eq/1303326238/>

からの抜粋です。

1. HAARP による電磁波攻撃の可能性

電磁波は直進の指向性を持つ。そのため、仮に地盤を破壊できると仮定しても、今回の地震のように幅百キロメートルの震源域を全て破壊できるとは考えがたい。

また、これは政治的な話だが、HAARP のサイト自体が電磁波のチャートを出していて、大震災の直前に波形が大きく変動しているのがわかる。

もし、地震兵器だとしたら、わざわざ自分で使ってますよ、とアピールするだろうか。

以下はベンジャミンあたりの HAARP で出来るの件がウソなことへの補足です。

↓

>地震兵器ハーブ HAARP, プラズマ兵器 etc の日本語説明 (by USITORANOKONJIN)

>http://www.youtube.com/watch?v=vI_UuJHsqTs (リンク切れ)

ですが、この中で「HAARPは超長波をパラボラアンテナで送信して云々」という説明がありましたが、そうだとすると大変なことになります。

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/3678200.html>

> パラボラアンテナでは、直径として波長の10倍以上は欲しいと言われていますので、

> そこから計算してはいかがでしょうか？波長=30万km÷周波数ですので、

> たとえばVHFの1チャンネル(100MHz程度)ですと波長は3mですから

> 直径30mの巨大パラボラが必要ということです

VHFの100MHzで30m直径、ならば超長波ではたとえば10kHzで計算すると $30\text{m} \times (100\text{MHz} / 10\text{kHz}) = 30 \times 10000$ 倍=300kmの直径になってしまう。

こんなものすごく大きなパラボラアンテナは作れないし、あの滑走路にあったパラボラアンテナはせいぜい数m程度だから、全然違ってでしょう。

それから、「電離層で反射して地上に撃つ」だとかは、そんな高い周波数では絶対に無理で、超短波帯(30~300MHz)以上は確実に抜けて宇宙に出て行くだけで地上に戻っては来ない。

↓

<http://www.geocities.jp/hiroyuki0620785/intercomp/wireless/ionosphere.htm>

ですから、地上にあるどんなアンテナから撃とうとも、

1. 超長波では指向性を保とうとすれば直径300kmものパラボラアンテナにしなければならぬがそんなものは製作不能だから、絶対にあり得ない

2. 指向性を保つにはどうしてもマイクロ波帯つまりレーザーにせざるを得ないから、それを地上から撃って電離層で反射させようなども不可能(全部宇宙に抜けていく)

したがって、あんなHAARPなんぞでやれるワケがないです。ですから「地上に向けて高エネルギー密度の電磁波を指向性高く狙って打ち込む」ためにはどうやっても「衛星から行なう」しかないということになるでしょう。

電磁波は水に弱いです。さらに周波数が高くなればなるほど水に弱くなります。
大雨でアナログは無事でも衛星からのBSはノイズ出るのがわかりやすい例。
携帯を防水ケースに入れて10センチも沈めたら圏外になります。

つまり衛星兵器持ってきても電離層抜けるような波長の短い電波では分厚い海水突き抜けられません。地殻深くまで照射できるわけがありません。
電磁波についての基本的な知識すら持ち合わせていないのがハーブ超兵器論者です。

※最近の携帯で完全防水の物があるのですが、実際にそのまま水中に沈めたところ確かに電波は圏外になったのを確認出来ました。

もし使っている人がいましたらお風呂の中で試してみてください。ですが故障しても責任は取れませんので、心配な方は透明で破れないビニール袋などに入れて試すように。

-
- >地震と相互作用を持つ電離層を加熱して発生させた適切な「極超長波 (ELF)」を、
 - >電離層から反射する形で、“起こしたい場所の地中に目がけて、地震を人工的に発生させる”
 - >可能性が、理論的に考えられます
 - >この極超長波は確かに、火山や構造プレートを揺るがす能力を有しており、
 - >さらに気象にも影響をもたらす事ができる。たとえば地震は、電離層と相互作用する
 - >ことが知られている

地震に伴って地面の下の応力場が広域で変化してそれにともなって地下の電気、磁気の状態が変化するとき、それが電離層に影響を与える、というのが真相で、それによってEスプライクな異常伝播が起こって地震前兆的な異常伝播を捉えろとかが一般に行なわれているだけで、

電離層の状態を変えたら、それが地下の応力場、歪み場を変化させられるとかそういう話は聞いたことがありませんw。

<http://137.229.36.30/cgi-bin/magnetometer/gak-mag.cgi>

にある「説明」見れば解る通り、これは単に「地磁気」の測定値。

↓

The three traces represent mutually orthogonal components of the earth's magnetic field as follows:

The "H" component (black trace) is positive magnetic northward

The "D" component (red trace) is positive eastward

The "Z" component (blue trace) is positive downward

電離層に下から打ち込んで電磁波の強度などでは全然ない。これは今回の大地震の前後で地磁気が揺らいだことの検知にはなってるということでそれなら昔から行なわれていた「地震前兆地磁気変動の観測」でも同様のデータが出ていただけでしょ。

さらにw

>地震は、電離層と相互作用することが知られている・・・

これはウソですネ？地震に伴って地面の下の応力場が広域で変化してそれにともなって地下の電気、磁気状態が変化するとき、それが電離層に影響を与える、という話ならこれまでも研究されてきました。それによってEスプライクな異常伝播が起こって地震前兆的な異常伝播を捉えろとかが一般に行なわれているだけで、

電離層の状態を変えたら、それが地下の応力場、歪み場を変化させられるとか、そんな話は <どこ> に出ているのですか???

まず根本的な問題として ELF で地震を誘発できるとは到底思えない。

確かに ELF は波長が 1 万~10 万 km と非常に長く、水中や地中にもある程度届く。
だから海中を潜行中の潜水艦に対する通信手段に用いられる。

しかし対潜水艦通信でも深度 100m 位まででないと思えない。
大地震の震源の海底地下 24km なんて通信すら全くできない。
通信にすら使えないのに、ましてや地震を誘発するような影響を ELF で与えるなんてまず無理。

そもそも波長が長いということはエネルギーが低い電磁波ということ。
(振幅が同じなら周波数が低い電磁波の方がエネルギーが低い)

この電波で物理的影響を与えるのは極めて効率が悪いので、莫大なエネルギーが必要。
電離層に最も影響力があるエネルギー源は太陽だがそれすら全く間に合わない。
当然地球上に太陽を越えるエネルギーを供給できる存在なんてない。

そもそも電離層は物質密度が極めて低いので、電離層が保持できる最大エネルギーは極めて限られるはずだ。勿論電離層から発生させるエネルギーもたかが知れていることになる。
さらに狙った場所にピンポイントで地震を誘発させるとリンク先は書いているが、波長が 1 万 km の ELF には絶対に不可能な芸当。明らかに物理学の基礎知識が無い。

阪神大震災以前から地震学者が、地震発生の約一週間前くらいに震源地周辺に不自然な超長派の電磁波とプラスイオンが出る事を指摘していたって知ってますよね？

これらが花崗岩同士を超高圧でこすりあわせた時に発生する事から電磁波やプラスイオンを観測する事で地震を事前に予知する仕組みに繋げようと研究してるのも知ってますよね？

さて、ハーブは大気の電離層やオーロラを調べる目的とされてますが米軍が関わってるところを見ると、恐らく通信障害に関係した研究もしてるんでしょう。

軍事において通信は非常に重要で、電磁波、電波を使う通信なら電離層研究は欠かせませんから。

ハーブはかなり大掛かりな設備みたいです。これだけ大掛かりなら巨大地震発生前の超長波電磁波を拾う事もあるんじゃないでしょうか？

だから地震発生時にグラフに不自然な動きがあっても別におかしいとは言えません。

あと、極超長波の電磁波で地震が起こせると言いますが、無理です w

極超長波は3ヘルツからですが、一つの波の距離が約10万kmと地球の直径より長い波長です。こんな波でどうやって振動や熱が発生させられるんですかね？

波長が長い分地下に透過するエネルギーも多いですが、それでも所詮電磁波です。

地下10km辺りまで行くとかなり弱くなります。

仮に複数発射して波の干渉による波長増幅を使ったとしてもそのホットスポット範囲は地球が丸々すっぽり入ります。地球全体が地震で揺れるとなると、えらいこっちゃです www

というよりそんな電磁波エネルギー、地球の全電力を束にしても出せません。

それでもハーブが地震兵器とか言いますか？言いますよね www

※以下は核爆弾説とかぶりますが、2ch内でも比較的重要な指摘なので載せておきます。

元電気通信大学教授の早川先生がずっと研究されてきていた電離層の乱れを検知する ことで大地震の前兆を知る件、再び伝えられていましたね。

→ 大地震、5～6日前に「前兆」 上空の電離層乱れる

これは、地震の起きる約1週間前に現れる前兆で、これまでの多くの大地震の前にも現れていたものでした。これを水爆で実現することができるとしたら、いったいどういう方法で可能になるのかを説明してくださいね。

大規模地震は「自己組織化臨界現象」といって、歪みが長い時間掛けて溜まって行ってどうやってもそのピークが他の断層やアスペリティの破壊で分散できない状況にまで追い込まれた段階に達したときに、初めてカタストロフィックな大破壊として実現してしまう種類のものでした。これは長い地震学研究成果の一つで、すでに基本的な常識となっています。

で、この運命決定プロセスにおいて震源核決定の「臨界」に達する時間は、その当該地震発生の約1日前ぐらいとなるのが一般的とされていましたが、それよりも早くこの前兆は現れる傾向があったようでした。

この終盤、直前の約1週間前ごろに現れる先行現象としてこの現象が現れることは早川先生たちの研究でだんだんわかってきていたのですが、それが今回も捉えられていたということでした。

水爆でその自己組織化臨界における応力歪み増大のピークが現れるころを狙って可能性のあるポイントを水爆で破壊しようとしたとしても、それがその1週間前の時点にさかのぼって影響を与えることはできそうにない。

もしピークに達しない時点で爆発をさせてしまえば、狙い通りの規模の大きな大地震にはならな
いかもしれない。それだけ破壊力が少なくなってしまうし、その場合は前兆のタイミングが合わ
なくなる。

要するに、自然地震に合わせて何かをしようとしても矛盾を来したり、予定通りの規模を実現
できない可能性がある。

また、もし自然に任せておいて大地震になることが事前にわかっていたのであれば、そのままそ
の大地震を自然のまま発生させてやればよいだけのことで、あえて足がつくかもしれないリスク
を負って水爆など使う必要もないとは言えるから、事前に巨大地震の前兆としてこれらの電離層
の異常を捉えていたのであれば、そんな余計な水爆などわざわざ付け加えて爆発させるようなこ
とはしなくてよいことになるでしょう。

そして、今回現実起こった地震においても、そのように現実の地震波形にはなんら水爆由来の
特徴となるものは現れていなかったわけでしたね。これはすべて示して見せ終わっていた通りで、

つまり、今回は、このように、

1. 地震は自己組織化臨界現象であること、その応力歪みのピークは約1日前となること
そこに合わせて水爆を爆発させれば、その地震波は当該地震の波形として検知されるはず

だが、地震波形にはそれは現れていないこと

2. 前兆現象として現実に当該地震発生の1週間前に電離層の異常が、これまでの多くの大地震で検知されていた通りに、やはり検知されていたこと
3. 3連続で震源が連動あるいは同期的に破壊開始したとしてもそれはこれまでもプレート境界型地震におけるアスペリティ（固着域）のカップリングによる連動、同期として不思議ではないこと

これらから、コシミズやその他の人工地震説はほとんど可能性がないだろうことを主張できると考えられるのでした。

これ以上詳しく述べる必要がない程に的確な指摘がされているので、もう十分だと思います。

なお本 PDF ファイルは必要であれば各自パソコン等に保存後、印刷するなりして活用して頂ければと思います。

By スミオ